

第1回 MIMOCA EYE / ミモカアイ 出展作家 座談会③ --テーマ「女性性/身体」



熊谷亜莉沙《あなたは誰だと思う?》(2022年) 撮影:宮脇慎太郎

第1回 MIMOCA EYE / ミモカアイでは、応募作品の中から選出された素材も技法もさまざまな作品が展示されています。若い作家たちは何をどう感じたのか、オンライン座談会を開催して意見交換をしてもらいました。最後となる3回目の座談会では、「女性性/身体」について熊谷亜莉沙さん、井上裕加里さん、西條茜さんの3人がそれぞれの出展作品を起点に話しました。

—トラウマを共有

熊谷亜莉沙



私は2点組一点の横長の絵画を出品しています。それぞれの作品がシングルベッドサイズになっています。このサイズにこだわって制作していますが、離婚していた私の父が孤独死し、腐乱死体で発見されたことがきっかけになっています。

父親は重い精神疾患を抱えていて家庭を顧みず、暴力を振るう人だったのですが、それを分かっている母は父に惹かれてしまったので、どうしても愛してしまったんだね、そうしたらもう仕方ないね、みたいな気持ちもあるんですね。

でもそれは、父親がもういないからそう思えるのかもしれませんが。どうしようもない、で済ませてはいけなくと、という気持ちが同時にあります。そんな経験から「偶像崇拜」は自分の作品の根幹にあるテーマになっています。

今回の作品ではモチーフとしてニューヨークの宗教施設にある彫像とその献花を選びました。

作品を作っている自分のコンセプトにとても共鳴してくれる鑑賞者が中にはいて、深刻で個人的なことを作品を見て思い出し、私に打ち明けてくれることがあります。そういう対話があったので、作者の傲慢かもしれませんが、鑑賞者に絵に何をみ出すのか問いかけて

タイトルを《あなたは誰だと思う?》にしました。

井上裕加里

熊谷さんの作品を見た方が個人的なお話を打ち明けた後はどんな感覚になっているのですか。



熊谷

私の作品を見て、過去の辛い体験を思い出したのに気持ちが落ち着いたら、と言う人たちは、絵を見て納得するようです。正直、私には分からない部分もあるんですけど、とてもありがたなことだと思っています。私の父親に関する話が結構ヘビーな内容なので、見た方も辛い体験をシェアしやすくなるのかもしれませんが、ただ、制作の背景について言葉で説明していない時でもトラウマを思い出す方もいるので、私の言葉が関係しないこともあるという感じがですね。

西條茜

背景の黒が喪に服す色で、花は祝祭の時にも飾りますが、死者に手向けるものでもあるし、見た人は何かさういものを感じ取るのかもしれないですね。トラウマ的な記憶を引き出す力が作品にあるのかもしれない、とお話を聞いて思いました。



井上

熊谷さんの作品はなんとというか、全てが美しいじゃないですか。それなのにセンシティブな話が出てくるのは驚きです。文章に出てくる言葉の強さもあって、作品が痛みを思い出させる装置になっていると思うと、面白い作用というか、不思議です。

熊谷

痛みを思い出させる装置ということは全然意識していなくて、ただ、自分自身が痛みをベースに作品を作っているというのはあるので、それが出ているのかもしれないと思います。

井上

痛みに共感して、共有することが鑑賞者の方にとってのケアにつながっているのかもしれないですね。

熊谷さんの作品には何か女性らしさみたいなものを感じるのですが、女性としての意識みたいなことは作品に込めていますか。

熊谷

作家活動を始めた頃、実は私の作品は男性作家が描いたと思われることが多かったんです。もし

かしたら年齢を重ねて女性性みたいなものを獲得してきたのかもしれませんが、自分自身は女性性とか男性性みたいなものは、すごく意識

しているのでむしろ意識しないようにしています。苦しみは色々なところにあるとすごく感じてい

て、男性と女性でどっちの方が生きづらいついことはあまり言いたくないですね。もちろん国

や地域によって、どちらの性の方がより権力を持っているというような不均衡はあって向き合

っていくかないといけない課題ですが、どちらの性にもそういった権力関係みたいなものからこぼれ落ちてしまった人はいるので、そんな人のこともやっぱり考えていきたいです。



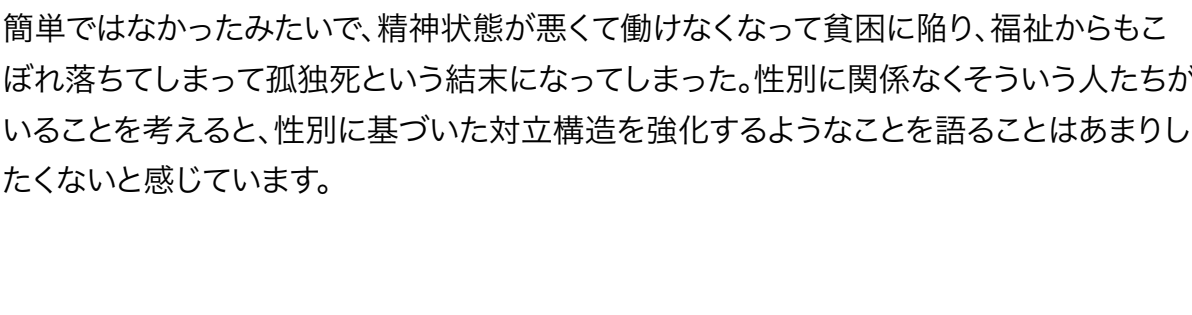
《あなたは誰だと思う?》(部分) 撮影:木奥恵三

西條

家族と過ごした時間もそういう思いには影響しているんですか。

熊谷

父親がもしまだ生きていたらずっと恨み続けていたかもしれないんですが、死んでしまった今、この人も福祉からこぼれ落ちてしまった人なんだ、と捉えられるようになったんですね。すごく辛い人生だったと思います。自分の配偶者や子供に暴力を振るうなんてことは本当に許されないことですが、それでも精神疾患を抱えていて、当時は精神科へのアクセスも簡単ではなかったみたいで、精神状態が悪くて働けなくなって貧困に陥り、福祉からこぼれ落ちてしまって孤独死という結末になってしまった。性別に関係なくそういう人たちがいることを考えると、性別に基づいた対立構造を強化するようなことを語ることはあまりしたくないと感じています。



井上裕加里《Asian women -Japan and Iran-》(2022年) 撮影:宮脇慎太郎

—自分ごととしてのフェミニズム

西條

井上さんの他の作品を見たら、今回の作品と違ってフェミニズムがテーマじゃなかったのでもちよと驚きました。境界がテーマというか、地域や国、性差など色々なことに関心があってその中の一つとしてフェミニズムもあると感じました。

井上

そうですね。人と人の関係性、一対一から一対複数、個人と社会、複数人と社会というように、枠組みや尺度をどう置かを作品ごとに考えてテーマを選んでいます。今回の出展作は、一昨年に自分が結婚して感じるようになった男女間のギャップみたいなものが起点になっています。女性性や世界の女性の地位の問題が気になり、リサーチを重ねてイランの女性の地位がかなり低いと知ったものの、肌感覚としては分らずにモヤモヤしたので、確かめてみようとして行ってきました。

以前の作品でシベリア抑留体験をした男性の方々にお話を聞いた時に、極寒の地域で重労働を課せられて五重苦と言われる

シベリア抑留を、楽しい成功体験としてお話する人も中にはいて、個人的にはかなりショックを受けました。別の作品では、植民地時代の韓国に渡って現地の男性と結婚し、70年以上も韓国に住んでいる女性たちの過酷な体験を聞きました。こうして歴史を紐解くような作品はこれまで作ってきましたが、男性が書いてきた歴史、まさにhis storyがhistory

になっていて、her story、女性の物語がなかなか見えてこないことに違和感を感じるようになったことが、今回の作品に繋がっているんだと思います。

正解が何なのか、分らないまま進んでいる状況ではありませんが、人の傷みたいなものを歴史に埋もれさせずに残していきたい、というのが私の活動の一番の要だと感じるものもありました。熊谷さんのお話を聞いて、制作の方法や作品との距離感に違いはありますが、人の傷に寄り添いたいという思いや目指す方向は近いのかな、と思いました。



《Asian women -Japan and Iran-》(部分) 撮影:木奥恵三

熊谷

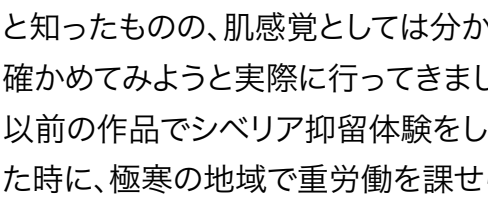
そう言っていたら私は本当に嬉しいですよ。

権力関係の中で虐げられている女性が世界中にいて、その人たちに着目して作品を作るのはとても重要だと思います。でも同時に、フェミニズムという切り口だけではなく、人間同士がどういう風に生きていけばいいのか、道徳や倫理とどう向き合っていけばいいのかということに井上さんは取り組んでいると感じました。私も考えていきたいことなので、根幹で共通する部分があると思いました。

西條

私もリサーチをするので、リサーチがベースにある作品は気になります。社会的な問題は、加害者と被害者がいたり、でもその関係性が反転することもあったりとセンシティブなところもあると思うので、色々なことに気を遣わなければならない難しさがあると想像するのですが、具体的にどんなことに気をつけているのか、興味があります。

井上



《Asian women -Japan and Iran-》(部分)

実は今日も次の作品の出展者の方々の方が傷つくことがないようにどうするのがいいか、考えていたところでした。制作では契約が発生することがあるので、法律家と相談することも結構ありますね。

一人称では語らずに三人称の作品を描いていきたい、と私はいつも言っています。ただ、私の中ではこの問題ってこうだよねって思ったりもするし、私なりの正解を書きながら制作していますが、様々な考えの人がいることももちろん理解しているけど、偏らないようにしています。

危ない目に遭って、あ、もうダメかな、って思うことがたまにありますね。私、イランでサリーを被らずにダンスしたんですよ。そんな作品も作りました。

西條

外国人であってもやはりサリーを被らないといけなのですね。

井上

サリーを被らなかつたから殺された女性がいる、その事件がイランの今のデモに繋がっています。このルールは外国人でも適用されて、私もサリーが少しずれただけでかなり注意されました。こんな東洋顔なんですけれどね。でも、展覧会でダンスの映像を流した後に事件のことを知って、思っていた以上に危ないことだったと気付きました。

西條

身を削っていますね。

井上

そうですね、でも私は普段の制作であんまり身を削っていないですね。西條さんは土と戦っているじゃないですか。そういう作家の方々はずいぶん思っています。

西條

身はあまり削っていないかもしれませんが、土の重さとは戦っているかもしれないです。

[次ページに続く →](#)